

4

二

今此書在石中其書也其書也

一、軍事委員會六次中、所修草案、  
初稿、及修正稿、均經軍事委員會、  
有人、亦、

乙付も市休家も休日故を以て此書  
は免れし物なりとの事と云ふ程に於

[illegible]







十二月

小三

一橋本赤市口御茶屋外に雲集

方赤市下

一昨夜此所救る多き事<sup>多</sup>但見<sup>多</sup>此

市赤市<sup>多</sup>云々<sup>多</sup>付<sup>多</sup>即<sup>多</sup>主<sup>多</sup>赤市

中<sup>多</sup>之<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>

一山川<sup>多</sup>河<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>

赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>

赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>

陰方<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>

一赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>

赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>

赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>

赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>

赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>

赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>

赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>

赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>

赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>赤市<sup>多</sup>



日暮後行

古寺東林

竹園

又寺西

山寺

福國

中夜

馬車

日暮

後寺

新寺

日暮

後寺

日暮

後寺

日暮

日暮

○

日暮

日暮

大果考

上卷

△市

公

少田又苑

陽春吹雪

一 每朝之御覽之方為諸  
臣等之山等外志等市等

石渠寶笈內編卷之六

五

[illegible]

十六日

六三

一、  
必  
有  
其  
時  
便  
云  
在  
後  
就  
以  
教  
事  
及  
各  
六  
年  
義  
士  
財  
便  
云  
在  
後  
及  
但  
兄  
老  
矣  
以  
時  
歸  
光  
武  
下  
於  
時  
彼  
志  
平  
未  
歸  
云  
而  
中  
與  
門

李烈鈞與海軍

一、  
本  
中  
生  
者  
七  
年  
間

行與友誼事亦復多不心也  
不介胡若平在與和列陣此  
年冬通古事久和學也  
車後出以傳一列陣此  
字殊成限中多公之

大日本

柳子成於此



山川所至なるを計りて  
中世以来の所を耶徒と  
下流の事

心月

行西友

一 却も此の所を計りて  
山川所至なるを計りて  
中世以来の所を耶徒と  
下流の事

一 漢より入るるもの  
山川所至なるを計りて  
中世以来の所を耶徒と  
下流の事

十七

藤原

一 漢より入るるもの  
山川所至なるを計りて  
中世以来の所を耶徒と  
下流の事

以道之所志，予亦以彼供人之刻，而為厚，  
吾亦及之，合帶之，而為中，而為中，而為中，  
而為中，而為中，而為中，而為中，而為中，

每粒一兩自包一兩粒一兩請  
 所交深河沙邱出洋於市如  
 所局人送王王王王王王王  
 下書亦視安南書人島而自以  
 有兩新和上上書人島而自以  
 之在在在在在在在在在在  
 水色也中中中中中中中中

五

出所乃知書在程表初過  
 往河東岸飲水如魚  
 我化深川一橋而後知香  
 芳如願也

有之者其初也  
中安申志中作  
少乃曰此亦  
未嘗不為

[illegible]



[illegible]

一 張子思之為家之他出也  
一 保州府之常民刻之其出也  
一 東之北之水也之山也之左之右也  
相也

一、河内縣東南多產金，上田志云：國鴻  
但人言青牛產金常古務美及之錄門  
在常市未考其詳。所以分別系方數  
人口所中亦因有來也。  
漢七世紀以呂平核而西太者之者  
少之之書同解之者要幼在上音

引續大なるなる北神田神社  
社田の由り山名程又安知なる  
上なる安程程なる

十八日

本日の

- 一 高木谷平河町内より上なる系  
ら来る
- 一 昨秋出たる多摩川に但見産花節  
の時より多摩川に在りて多摩川  
其の山に安程なる青い山なり
- 一 毎朝の御月之なる物なり
- 一 山供の産花節なる多摩川に在りて多摩川  
自給の山に在りて多摩川に在りて多摩川  
重なる山に在りて多摩川に在りて多摩川



古河市河津町に在る  
山崎中百の田舎に在る  
形勢自給自足の人々  
は道自給自足の人々

一 山崎中百の田舎に在る  
形勢自給自足の人々

一 山崎中百の田舎に在る  
形勢自給自足の人々

一 山崎中百の田舎に在る  
形勢自給自足の人々

此の山崎中百の田舎に在る  
形勢自給自足の人々

九

仁壽

[illegible]

一、每部一冊

法取次作是  
 此古刻本止南唐李公口說  
 及今有字云云  
 其後亦有古本  
 內古刻本古本

[illegible]



廿四 一 律の處

橋和洋八中より新田中へ宛てた書  
おす作  
一 常より外障しはるるをわがまを友  
多き度にも人より中へ宛てた書  
市より新田中へ宛てた書  
一 日 中へ宛てた書より宛てた書

橋和洋八中より新田中へ宛てた書  
おす作  
一 常より外障しはるるをわがまを友  
多き度にも人より中へ宛てた書  
市より新田中へ宛てた書  
一 日 中へ宛てた書より宛てた書

責しつる書より 中へ宛てた書  
おす作  
一 常より外障しはるるをわがまを友  
多き度にも人より中へ宛てた書  
市より新田中へ宛てた書  
一 日 中へ宛てた書より宛てた書

御覽

三才圖會

預言中示下

歌聖以反

七

修志序

役口極兼常々作也

陳

振華銀行廣告





竹百文とある

一 朝夕にても茶を飲む

一 小春の借し物使に用事し、以て積聚し

てお越さるる也

一 市に於て紅糸を収るる、故に又助に梅

香を<sup>お</sup>借し、仲末の末を<sup>お</sup>借し、以て可

利を得る者、口利中、同月、お也

十一日

木下吉

一 移居降、京に於て、内所、お也、お也

お也

一 昨夜、山に於て、梅香、お也、お也

一 大助、お也、お也、お也、お也

一 春、お也、お也、お也、お也

一 竹、お也、お也、お也、お也

御用、後、お也、お也、お也、お也

多  
朝可之也

四月廿

辨事  
録新

一橋大弼云  
市田宗相中  
徳川秋元  
宗 小持友  
柳重茂

一 昭々時之令以世授焉 即事

肉と世とは何れも志し 此世を以て事  
書簡を度りて力ある所は

但此世之是上と云ふ

一 高田大弼侯云 重臣侯事と云ふ事  
大目御細く仰渡すは禮儀角より成  
其方より存心謙遜の道に在り

一 吉平可世世と云ふは 懐妊の懐妊は唯世  
懐入御説を云ふ也

一 昭々時之令以世授焉 即事  
市田宗相中 徳川秋元 宗 小持友 柳重茂

即此而後其山名之  
 於身也中自圓其足  
 而後見之其山名之  
 其山名之其山名之  
 其山名之其山名之  
 其山名之其山名之

立

仁壽

[illegible]

一 ちいさなこころに

うきうき

はなはた ちいさなこころ

うきうき ちいさなこころ

うきうき

うきうき

うきうき ちいさなこころ

うきうき

うきうき

うきうき

うきうき

うきうき

うきうき ちいさなこころ

うきうき

うきうき ちいさなこころ

うきうき

うきうき

うきうき

うきうき ちいさなこころ

うきうき ちいさなこころ

うきうき ちいさなこころ

うきうき ちいさなこころ

うきうき ちいさなこころ





世之

滕王閣

厚其厚年止老如中止  
前年素

[illegible][illegible]

高田夜芳所報類々なる事あり田圃

一村屋草花も雨止後等 江戸府本郷

新通へ作り置き中なる高田夜芳より  
と我々も物運来等へ此の如き事  
ありと云ふ

中野定入る高田夜芳

一 幸地も亦動林 堀川店次第

格々 江戸中 恒々自今

高田夜芳

有通へ作り置き中なる事あり

一 深川は勿論也此の如き事あり江戸府本郷

方々より作り置き中なる事あり江戸府本郷

高田夜芳より作り置き中なる事あり江戸府本郷

江戸府本郷より作り置き中なる事あり江戸府本郷

江戸府本郷より作り置き中なる事あり江戸府本郷

江戸府本郷より作り置き中なる事あり江戸府本郷

一 江戸府本郷より作り置き中なる事あり江戸府本郷

江戸府本郷より作り置き中なる事あり江戸府本郷

江戸府本郷より作り置き中なる事あり江戸府本郷

右の書信奉行の事は海に

一由き書信奉行の事は海に

仲より山に生きたる後 神宮大寺

与りお教書に

有る世方より海に

一先般山底の山に海に生きたる後 神宮大寺

介法を言ふ事より代根信書に生きたる

氏に教書に生きたる山に海に生きたる後

先般山底の山に海に生きたる後 神宮大寺

以り生きたる山に海に生きたる後 神宮大寺

申海に

一朝夕山に生きたる山に海に

一山に生きたる山に海に生きたる後 神宮大寺

先般山底の山に海に生きたる後 神宮大寺

氏に教書に生きたる山に海に生きたる後

山に生きたる山に海に生きたる後

先般山底の山に海に生きたる後 神宮大寺

氏に教書に生きたる山に海に生きたる後

山に生きたる山に海に生きたる後



亦買  
杏

[illegible]

一  
明飲酒之數多而害云未得甚家  
界時族親之別而害亦多其甘  
報也子之過也子之失也事也  
子之失也子之失也

唐淑祚年俗所用之月照之面表

道中音韻卷之五  
有九音反邊  
四月八日  
一海方身送

一、夏後師夢玄之曰：高祖就唐中書令  
出中台司馬之身，一殿中而如仰俯道  
以老玄之也。

一、印之の陸軍

一 留之也  
一 則其互田之者  
一 其互田之者  
一 其互田之者



乃多事于人心中百千事

市

人三書

一、楊市河市は内山今更なる所  
一、昭和元年秋九月三日  
一、昭和元年秋九月三日

